

一般会計等貸借対照表

(平成30年 3月31日現在)

(単位:円)

科目	金額	科目	金額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	44,937,386,395	固定負債	16,632,959,427
有形固定資産	43,246,948,578	地方債	14,385,379,427
事業用資産	24,653,370,193	長期未払金	0
土地	9,479,776,422	退職手当引当金	2,247,580,000
立木竹	0	損失補償等引当金	0
建物	30,754,235,461	その他	0
建物減価償却累計額	-15,739,233,373	流動負債	1,552,471,975
工作物	407,919,816	1年内償還予定地方債	1,255,515,392
工作物減価償却累計額	-249,328,133	未払金	0
船舶	0	未払費用	0
船舶減価償却累計額	0	前受金	0
浮標等	0	前受収益	0
浮標等減価償却累計額	0	賞与等引当金	277,451,202
航空機	0	預り金	19,505,381
航空機減価償却累計額	0	その他	0
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	0		
インフラ資産	18,406,806,287		
土地	3,546,844,618		
建物	65,520,000		
建物減価償却累計額	-28,636,018		
工作物	29,180,142,731		
工作物減価償却累計額	-14,368,469,044		
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	11,404,000		
物品	1,111,994,807		
物品減価償却累計額	-925,222,709		
無形固定資産	0		
ソフトウェア	0		
その他	0		
投資その他の資産	1,690,437,817		
投資及び出資金	394,970,630		
有価証券	28,282,530		
出資金	366,688,100		
その他	0		
投資損失引当金	-149,999,999		
長期延滞債権	106,834,331		
長期貸付金	25,575,200		
基金	1,324,831,787		
減債基金	9,297,000		
その他	1,315,534,787		
その他	0		
徴収不能引当金	-11,774,132		
流動資産	2,249,730,169		
現金預金	998,966,660		
未収金	24,566,998		
短期貸付金	0		
基金	1,226,338,391		
財政調整基金	1,125,133,528		
減債基金	101,204,863		
棚卸資産	0		
その他	0		
徴収不能引当金	-141,880		
資産合計	47,187,116,564		
		負債合計	18,185,431,402
		【純資産の部】	
		固定資産等形成分	46,218,664,586
		余剰分(不足分)	-17,216,979,424
		純資産合計	29,001,685,162
		負債及び純資産合計	47,187,116,564

【様式第2号及び第3号(結合)】

一般会計等行政コスト及び純資産変動計算書

自 平成29年 4月 1日
至 平成30年 3月31日

(単位:円)

科目	金額		
経常費用	13,416,556,256		
業務費用	6,990,808,823		
人件費	2,229,924,861		
職員給与費	1,622,529,258		
賞与等引当金繰入額	277,451,202		
退職手当引当金繰入額	161,478,355		
その他	168,466,046		
物件費等	4,560,920,947		
物件費	2,867,370,189		
維持補修費	141,635,456		
減価償却費	1,551,067,342		
その他	847,960		
その他の業務費用	199,963,015		
支払利息	139,018,224		
徴収不能引当金繰入額	3,415,289		
その他	57,529,502		
移転費用	6,425,747,433		
補助金等	2,697,218,544		
社会保障給付	2,057,233,068		
他会計への繰出金	1,639,581,303		
その他	31,714,518		
経常収益	357,038,725		
使用料及び手数料	167,632,827		
その他	189,405,898		
純経常行政コスト	13,059,517,531		
臨時損失	7,949,976		
災害復旧事業費	7,906,968		
資産除売却損	43,008		
投資損失引当金繰入額	0		
損失補償等引当金繰入額	0		
その他	0		
臨時利益	65,555,882		
資産売却益	65,555,882		
その他	0		
純行政コスト	13,001,911,625		
財源	12,651,638,672		
税収等	9,377,226,720		
国県等補助金	3,274,411,952		
本年度差額	-350,272,953		
固定資産等の変動(内部変動)			
有形固定資産等の増加		-1,023,655,731	1,023,655,731
有形固定資産等の減少		565,369,078	-565,369,078
貸付金・基金等の増加		-1,551,110,358	1,551,110,358
貸付金・基金等の減少		717,891,588	-717,891,588
資産評価差額	-8,828	-755,806,039	755,806,039
無償所管換等	1	-8,828	
その他	-1,521,245	1	
本年度純資産変動額	-351,803,025	-1,521,245	0
前年度末純資産残高	29,353,488,187		
本年度末純資産残高	29,001,685,162	-1,025,185,803	673,382,778
		47,243,850,389	-17,890,362,202
		46,218,664,586	-17,216,979,424

【様式第4号】

一般会計等資金収支計算書

自 平成29年 4月 1日

至 平成30年 3月31日

(単位:円)

科目	金額
【業務活動収支】	
業務支出	11,923,251,730
業務費用支出	5,497,504,297
人件費支出	2,291,102,966
物件費等支出	3,009,853,605
支払利息支出	139,018,224
その他の支出	57,529,502
移転費用支出	6,425,747,433
補助金等支出	2,697,218,544
社会保障給付支出	2,057,233,068
他会計への繰出支出	1,639,581,303
その他の支出	31,714,518
業務収入	13,000,987,359
税込等収入	9,371,393,211
国県等補助金収入	3,274,411,952
使用料及び手数料収入	167,640,795
その他の収入	187,541,401
臨時支出	7,906,968
災害復旧事業費支出	7,906,968
その他の支出	0
臨時収入	0
業務活動収支	1,069,828,661
【投資活動収支】	
投資活動支出	1,283,260,666
公共施設等整備費支出	565,369,078
基金積立金支出	625,151,588
投資及び出資金支出	0
貸付金支出	92,740,000
その他の支出	0
投資活動収入	821,361,929
国県等補助金収入	0
基金取崩収入	659,829,279
貸付金元金回収収入	95,976,760
資産売却収入	65,555,890
その他の収入	0
投資活動収支	-461,898,737
【財務活動収支】	
財務活動支出	1,251,859,821
地方債償還支出	1,251,859,821
その他の支出	0
財務活動収入	852,800,000
地方債発行収入	852,800,000
その他の収入	0
財務活動収支	-399,059,821
本年度資金収支額	208,870,103
前年度末資金残高	770,591,176
本年度末資金残高	979,461,279
前年度末歳計外現金残高	27,027,029
本年度歳計外現金増減額	-7,521,648
本年度末歳計外現金残高	19,505,381
本年度末現金預金残高	998,966,660

全体貸借対照表

(平成30年 3月31日現在)

(単位:円)

科目	金額	科目	金額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	67,651,192,741	固定負債	33,572,919,740
有形固定資産	64,248,785,205	地方債	23,911,871,505
事業用資産	24,653,370,194	長期未払金	0
土地	9,479,776,422	退職手当引当金	2,612,811,750
立木竹	0	損失補償等引当金	0
建物	30,755,505,611	その他	7,048,236,485
建物減価償却累計額	-15,740,503,522	流動負債	2,663,587,033
工作物	407,919,816	1年内償還予定地方債	2,081,811,530
工作物減価償却累計額	-249,328,133	未払金	248,519,628
船舶	0	未払費用	0
船舶減価償却累計額	0	前受金	0
浮標等	0	前受収益	0
浮標等減価償却累計額	0	賞与等引当金	305,029,528
航空機	0	預り金	28,226,347
航空機減価償却累計額	0	その他	0
その他	0		
その他減価償却累計額	0	負債合計	36,236,506,773
建設仮勘定	0		
インフラ資産	39,237,580,662	【純資産の部】	
土地	3,787,580,683	固定資産等形成分	68,791,330,062
建物	626,904,977	余剰分(不足分)	-33,560,078,842
建物減価償却累計額	-290,310,447		
工作物	58,162,311,803		
工作物減価償却累計額	-23,144,592,358		
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	95,686,004		
物品	1,770,643,988		
物品減価償却累計額	-1,412,809,639		
無形固定資産	1,058,190,060		
ソフトウェア	0		
その他	1,058,190,060		
投資その他の資産	2,344,217,476		
投資及び出資金	398,309,630		
有価証券	28,282,530		
出資金	370,027,100		
その他	0		
投資損失引当金	-149,999,999		
長期延滞債権	243,390,236		
長期貸付金	25,575,200		
基金	1,852,267,638		
減債基金	9,297,000		
その他	1,842,970,638		
その他	72,620		
徴収不能引当金	-25,397,849		
流動資産	3,816,565,252		
現金預金	2,387,852,905		
未収金	206,217,700		
短期貸付金	0		
基金	1,226,338,391		
財政調整基金	1,125,133,528		
減債基金	101,204,863		
棚卸資産	10,708,645		
その他	3,209,000		
徴収不能引当金	-17,761,389		
資産合計	71,467,757,993	純資産合計	35,231,251,220
		負債及び純資産合計	71,467,757,993

全体行政コスト及び純資産変動計算書

自 平成29年 4月 1日
至 平成30年 3月31日

(単位:円)

科目	金額	金額	
経常費用	20,962,256,929		
業務費用	9,023,644,252		
人件費	2,673,239,320		
職員給与費	1,823,990,174		
賞与等引当金繰入額	305,029,528		
退職手当引当金繰入額	369,499,272		
その他	174,720,346		
物件費等	5,897,202,266		
物件費	3,428,089,596		
維持補修費	178,688,694		
減価償却費	2,289,525,116		
その他	898,860		
その他の業務費用	453,202,666		
支払利息	330,844,848		
徴収不能引当金繰入額	21,087,524		
その他	101,270,294		
移転費用	11,938,612,677		
補助金等	2,869,437,114		
社会保障給付	9,037,429,845		
他会計への繰出金	0		
その他	31,745,718		
経常収益	1,479,069,100		
使用料及び手数料	1,254,377,604		
その他	224,691,496		
純経常行政コスト	19,483,187,829		
臨時損失	196,977,543		
災害復旧事業費	7,906,968		
資産除売却損	29,443,461		
投資損失引当金繰入額	0		
損失補償等引当金繰入額	0		
その他	159,627,114		
臨時利益	78,293,102		
資産売却益	78,228,817		
その他	64,285		
純行政コスト	19,601,872,270		
財源	19,346,477,322		
税収等	13,693,087,936		
国県等補助金	5,653,389,386		
本年度差額	-255,394,948		
固定資産等の変動(内部変動)			
有形固定資産等の増加		-1,153,779,766	1,153,779,766
有形固定資産等の減少		1,217,306,952	-1,217,306,952
貸付金・基金等の増加		-2,379,450,410	2,379,450,410
貸付金・基金等の減少		835,970,731	-835,970,731
資産評価差額	-8,828	-827,607,039	827,607,039
無償所管換等	5,209,151	-8,828	
その他	-1,521,245	5,209,151	
本年度純資産変動額	-251,715,870	-1,521,245	0
前年度末純資産残高	35,482,967,090		898,384,818
本年度末純資産残高	35,231,251,220		69,941,430,750
			-34,458,463,660
			68,791,330,062
			-33,560,078,842

【様式第4号】

全体資金収支計算書

自 平成29年 4月 1日
至 平成30年 3月31日

(単位:円)

科目	金額
【業務活動収支】	
業務支出	18,450,255,048
業務費用支出	6,511,642,371
人件費支出	2,541,048,513
物件費等支出	3,538,353,126
支払利息支出	330,844,848
その他の支出	101,395,884
移転費用支出	11,938,612,677
補助金等支出	2,869,437,114
社会保障給付支出	9,037,429,845
他会計への繰出支出	0
その他の支出	31,745,718
業務収入	20,624,743,122
税込等収入	13,691,256,783
国県等補助金収入	5,481,916,583
使用料及び手数料収入	1,228,742,757
その他の収入	222,826,999
臨時支出	167,534,082
災害復旧事業費支出	7,906,968
その他の支出	159,627,114
臨時収入	0
業務活動収支	2,006,953,992
【投資活動収支】	
投資活動支出	1,819,694,526
公共施設等整備費支出	983,723,795
基金積立金支出	743,230,731
投資及び出資金支出	0
貸付金支出	92,740,000
その他の支出	0
投資活動収入	1,063,296,799
国県等補助金収入	144,788,000
基金取崩収入	731,630,279
貸付金元金回収収入	95,976,760
資産売却収入	90,901,760
その他の収入	0
投資活動収支	-756,397,727
【財務活動収支】	
財務活動支出	2,102,016,031
地方債償還支出	2,102,016,031
その他の支出	0
財務活動収入	1,181,400,000
地方債発行収入	1,181,400,000
その他の収入	0
財務活動収支	-920,616,031
本年度資金収支額	329,940,234
前年度末資金残高	2,038,407,290
本年度末資金残高	2,368,347,524
前年度末歳計外現金残高	27,027,029
本年度歳計外現金増減額	-7,521,648
本年度末歳計外現金残高	19,505,381
本年度末現金預金残高	2,387,852,905

連結貸借対照表

(平成30年 3月31日現在)

(単位:円)

科目	金額	科目	金額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	70,568,759,047	固定負債	35,650,420,281
有形固定資産	66,793,586,161	地方債等	25,513,779,204
事業用資産	26,700,959,966	長期未払金	0
土地	9,868,597,975	退職手当引当金	3,019,152,182
立木竹	0	損失補償等引当金	0
建物	33,782,720,723	その他	7,117,488,896
建物減価償却累計額	-17,252,269,404	流動負債	3,021,901,568
工作物	739,470,980	1年内償還予定地方債等	2,315,487,682
工作物減価償却累計額	-463,981,493	未払金	305,611,246
船舶	0	未払費用	20,286,070
船舶減価償却累計額	0	前受金	1,015,534
浮標等	0	前受収益	0
浮標等減価償却累計額	0	賞与等引当金	349,561,629
航空機	0	預り金	28,480,346
航空機減価償却累計額	0	その他	1,459,062
その他	0	負債合計	38,672,321,850
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	26,421,186	【純資産の部】	
インフラ資産	39,240,377,520	固定資産等形成分	71,716,594,809
土地	3,787,580,683	余剰分(不足分)	-35,761,887,659
建物	626,904,977	他団体出資等分	0
建物減価償却累計額	-290,310,447		
工作物	58,172,091,027		
工作物減価償却累計額	-23,151,574,724		
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	95,686,004		
物品	4,736,469,870		
物品減価償却累計額	-3,884,221,195		
無形固定資産	1,061,394,932		
ソフトウェア	2,916,167		
その他	1,058,478,765		
投資その他の資産	2,713,777,953		
投資及び出資金	243,309,630		
有価証券	28,282,530		
出資金	215,027,100		
その他	0		
長期延滞債権	243,398,321		
長期貸付金	27,951,800		
基金	2,219,945,081		
減債基金	9,297,000		
その他	2,210,648,081		
その他	4,571,407		
徴収不能引当金	-25,398,286		
流動資産	4,058,269,954		
現金預金	2,514,755,588		
未収金	319,824,648		
短期貸付金	0		
基金	1,226,338,391		
財政調整基金	1,125,133,528		
減債基金	101,204,863		
棚卸資産	15,708,045		
その他	3,413,888		
徴収不能引当金	-21,770,606		
繰延資産	0		
資産合計	74,627,029,000	純資産合計	35,954,707,150
		負債及び純資産合計	74,627,029,000

連結行政コスト及び純資産変動計算書

自 平成29年 4月 1日
至 平成30年 3月31日

(単位:円)

科目	金額	金額		
		固定資産等形成分	余剰分(不足分)	他団体出資等分
経常費用	22,262,406,517			
業務費用	10,910,365,574			
人件費	3,554,625,494			
職員給与費	2,541,975,018			
賞与等引当金繰入額	349,561,444			
退職手当引当金繰入額	408,847,056			
その他	254,241,977			
物件費等	6,863,187,693			
物件費	3,958,177,296			
維持補修費	265,099,066			
減価償却費	2,447,219,303			
その他	192,692,029			
その他の業務費用	492,552,386			
支払利息	348,314,102			
徴収不能引当金繰入額	21,175,905			
その他	123,062,380			
移転費用	11,352,040,943			
補助金等	2,279,388,137			
社会保障給付	9,038,050,937			
その他	34,601,869			
経常収益	2,546,524,752			
使用料及び手数料	1,960,577,443			
その他	585,947,309			
純経常行政コスト	19,715,881,766			
臨時損失	208,229,737			
災害復旧事業費	7,906,968			
資産除売却損	30,531,346			
損失補償等引当金繰入額	0			
その他	169,791,424			
臨時利益	107,310,283			
資産売却益	78,228,851			
その他	29,081,432			
純行政コスト	19,816,801,220		19,816,801,220	
財源	19,585,433,086		19,585,433,086	
税収等	13,917,425,646		13,917,425,646	
国県等補助金	5,668,007,440		5,668,007,440	
本年度差額	-231,368,134		-231,368,134	0
固定資産等の変動(内部変動)		-1,020,312,254	1,020,312,254	
有形固定資産等の増加		1,342,835,610	-1,342,835,610	
有形固定資産等の減少		-2,538,232,482	2,538,232,482	
貸付金・基金等の増加		876,989,542	-876,989,542	
貸付金・基金等の減少		-701,904,924	701,904,924	
資産評価差額	7,697,262	7,697,262		
無償所管換等	5,209,151	5,209,151		
他団体出資等分の増加	0			0
他団体出資等分の減少	0			0
比例連結割合変更に伴う差額	-11,644,278	69,864,711	-81,508,990	
その他	66,736,770	84,225,749	-17,488,979	
本年度純資産変動額	-163,369,230	-853,315,381	689,946,151	0
前年度末純資産残高	36,118,076,380	72,569,910,189	-36,451,833,810	0
本年度末純資産残高	35,954,707,150	71,716,594,809	-35,761,887,659	0

【様式第4号】

連結資金収支計算書

自 平成29年 4月 1日

至 平成30年 3月31日

(単位:円)

科目	金額
【業務活動収支】	
業務支出	19,422,801,813
業務費用支出	8,070,760,743
人件費支出	3,388,044,756
物件費等支出	4,211,137,927
支払利息支出	348,392,997
その他の支出	123,185,064
移転費用支出	11,352,041,069
補助金等支出	2,279,388,229
社会保障給付支出	9,038,050,971
その他の支出	34,601,869
業務収入	21,931,698,400
税込等収入	13,944,823,879
国県等補助金収入	5,483,101,180
使用料及び手数料収	1,935,245,309
その他の収入	568,528,032
臨時支出	177,698,392
災害復旧事業費支出	7,906,968
その他の支出	169,791,424
臨時収入	28,967,147
業務活動収支	2,360,165,342
【投資活動収支】	
投資活動支出	1,979,360,017
公共施設等整備費支	1,109,252,453
基金積立金支出	776,416,924
投資及び出資金支出	0
貸付金支出	93,690,640
その他の支出	0
投資活動収入	1,099,772,958
国県等補助金収入	163,823,462
基金取崩収入	749,070,942
貸付金元金回収収入	95,976,760
資産売却収入	90,901,794
その他の収入	0
投資活動収支	-879,587,059
【財務活動収支】	
財務活動支出	2,750,670,929
地方債等償還支出	2,749,211,867
その他の支出	1,459,062
財務活動収入	1,429,765,942
地方債等発行収入	1,429,765,942
その他の収入	0
財務活動収支	-1,320,904,987
本年度資金収支額	159,673,297
前年度末資金残高	2,333,253,802
比例連結割合変更に伴う差額	2,180,460
本年度末資金残高	2,495,107,558
前年度末歳計外現金残高	27,115,878
本年度歳計外現金増減額	-7,467,848
本年度末歳計外現金残高	19,648,030
本年度末現金預金残高	2,514,755,588

平成29年度

南陽市

統一的な基準による財務書類

説明資料

平成31年3月

落合公認会計士事務所

目 次

- I 地方公会計制度について
- II 平成29年度 南陽市財務書類の公表について
- III 平成29年度 財務書類（要約）
 - (1)貸借対照表〔バランスシート〕
 - (2)行政コスト計算書及び純資産変動計算書
 - (3)資金収支計算書
- IV 分析比率
- V 財務書類からわかること
 - (1)比較分析のための前提条件等
 - (2)基礎的財政収支の状況・・・資金収支計算書より
 - (3)地方債等と現金預金の状況
 - (4)地方債等と現金預金の経年推移
 - (5)純資産変動計算書の「本年度差額」の状況
 - (6)純資産変動計算書の「固定資産等の変動」の状況
 - (7)歳入歳出決算書の経年データ

I 地方公会計制度について

1. 固定資産台帳と財務書類作成の必要性

- ① 財源のなかに借金も含めて財政運営をしてきたため、債務が肥大化。
- ② 歳入増、歳出減は難しく、資産債務改革が必要となり、資産に手を付けることになった。
- ③ 資産債務の適正管理や資産の有効活用等について、平成18年5月公表の新地方公会計制度研究会報告書でとりまとめられた。
- ④ 公有財産台帳並びに各種法定台帳による「数量管理」から、固定資産台帳による「金額管理」が必要とされた。
- ⑤ 厳しい財政事情のもと、財政の透明性、効率化、適正化が求められ、企業会計手法を活用した財務書類の開示も求められた。

2. 債務が肥大化した理由

固定資産形成に充てるための借金には、財政において次の特徴を有することも、理由の一つである。

- ① 財政運営上、借金は、現役世代と将来世代をつなぎ世代間公平性を確保するための、重要な架け橋。
- ② 予算編成上、後日交付税処置される借金は、税込・補助金収入と同様に、重要な財源である。

3. 企業会計手法とは

(1) 収支の概念の導入

- ① 予算の適正・確実な執行においては、歳入と歳出は一致しなければならない。
- ② 財政状態を診断するためには、歳入から歳出を差し引いた収支尻の概念が必要となる。

(2) 基礎的財政収支(借金に依存しなかった場合の収支)

- ① 基礎的財政収支とは、計算上は、歳入から繰越金と公債発行を、歳出から公債費を、除外した収支。
- ② 借金を財源とした結果、債務が肥大化したので、借金に依存しなかった場合の収支を把握する。

(3) 純資産変動計算書の本年度差額

4. 財務書類とは？

(1) 財務書類とは、自治体の「立ち位置」・「身の丈」を表す書類で、健康診断書でもあり、4表又は3表から構成される。

種類	数値の内容	収支尻概念の導入	情報内容
貸借対照表	発生主義データを含み、 年度末時点の財政状態を示す	純資産	年度末の財政状態 を示す(ストック情報)
行政コスト計算書	減価償却費等の発生主義データを含む 現役世代に対する資源配分の内訳を示す	純行政コスト	1年間の運営状況 を示す(フロー情報)
純資産変動計算書	現役世代に対する資源配分の合計額と将来世代に対する資源配 分の増減額、並びに税込等財源を対比させ運営状況を示す	本年度差額	
資金収支計算書	現金主義により、 資金収支による運営状況を示す	基礎的財政収支	

⇨ 当年度末のストック情報 = 前年度末のストック情報 + 本年度のフロー情報

(2) 総務省の財務書類に対する考え方

- ① 「財政の三つの役割」には、「資源配分機能」、「所得再配分機能」および「経済調整機能」。
- ② 「資源配分機能」は、現役世代に対する資源配分と、将来世代に対する資源配分がある。
- ③ 財務書類の作成指針として、「民間の利益目的」でなく、「財政の三つの役割」を基礎にしている。

(3) 3表様式の長所

- ① 行政コスト計算書は現役世代に対する資源配分の状況を示すに過ぎず、4表の内の1表として単独で表示するほど重要ではない。
- ② 行政コスト計算書と純資産変動計算書を結合させた書類が、民間企業の損益計算書に相当する。
- ③ 現役世代と将来世代に対する資源配分の状況の各内訳が、一つの表に集約されたので、議員、住民に対する説明が、しやすくなった。

(4) 連結決算とは？

- ① 全体会計 = 親 + 子 = 一般会計等決算 + 公営事業会計
連結決算 = 親 + 子 + 親戚 = 一般会計等決算 + 公営事業会計 + 外郭団体(一組・広域 + 関係団体)
- ② 連結決算の必要性
・ 親・子・親戚間で、「繰出金」、「負担金・補助金」、「委託費」を支出しており、資金関係が密接なため、相殺表示が必要である。

(5) 発生主義決算とは？

- ① ・歳入・歳出決算数値に、「見えないおカネ」を加えて決算すること。
・「見えないおカネ」とは、将来、資金の流出入が見込まれる事象に係る数値で、「発生主義数値」ともいう。
- ② 発生主義数値の例
・ 将来、資金の出し入れを伴い、債権債務の確定したもの……………収入未済額、リース債務等
・ 現在、債権・債務は確定していないが、確定に準じたもの……………賞与引当金、退職手当引当金等
・ 現時点の保有する資産の価値の増減を推定する項目……………減価償却費、不納欠損額、評価損益等

5. 統一的な基準の活用方法

(1) 固定資産データの活用

毎年の「維持費」に「減価償却費」を加えてフルコストによる「事業別または施設別収支」を作成すること

- ① 施設の更新、統廃合について、リストアップして議論する段階で、数値情報を提供する。
- ② フルコストによる受益者負担割合算定のための、数値情報を提供する。
- ③ 民間の資金・ノウハウを活用したPPP/PFIの導入のために、固定資産データの公表が期待される。

(2) 財務書類の活用

財務書類は、自治体の立ち位置・身の丈を把握する健康診断書である。

- ① 全ての地方公共団体が「統一的な基準」に基づき財務書類を作成するので、比較を可能にする
- ② 下記の指標により、財政運営上の目標設定を行い、今後の予算編成に活用する。
(イ) 利払後基礎的財政収支並びに公債等償還可能年数 (ロ) 一人当たり実質債務残高

6. 日々仕訳とは？

(1) 目的により簿記の方法が異なる。

- ① 予算の適正・確実な執行のためには、「複式簿記」より「単式簿記」が優れている。
- ② 財務書類を作成する場合、「見えないお金」も含むために、数値の正確性を担保するためには、「複式簿記」が必要。

(2) 複式簿記の記帳のタイミング

- ① 「日々仕訳」が望ましいとされているが、そのためには全庁的に知識が必要。
- ② 金銭の入出金程度の記帳ならまだしも、日常業務に加えて複式簿記の習得など、民間ではあり得ない。
- ③ 事務負担や経費負担を考えて、「今後の新地方公会計の推進に関する研究会報告書(平成26年4月総務省)294項」に記載された「期末一括仕訳方式」により作成する。

7. 固定資産台帳の基準モデル団体への取り扱い

- ① 固定資産マニュアルによれば、「既に固定資産台帳が基準モデル等に基づいて評価されている資産について、合理的かつ客観的な基準によって評価されたものであれば、引き続き、当該評価額によることを許容する」と記載し、二重負担を回避している。
- ② 道路、河川及び水路の敷地については、統一的な基準では、一定の場合1円評価としており、基準モデル評価を継続する場合、基準が異なることによる評価誤差が大きくなるので注記が求められる。

8. 統一的な基準で求められる複式簿記の方法

(1) 財務書類作成の概略

- ① すべての資金取引について「仕訳変換」を行い、かつ、すべての非資金取引について「仕訳処理」を行い、仕訳帳に記載する。
- ② 仕訳帳が完成したら、会計ソフト、表計算ソフト等により集計し、総勘定元帳並びに試算表に転記し、財務書類が完成。

(2) 仕訳帳への記載の仕方

- ① 単式簿記により記帳された歳入歳出データは、「仕訳変換処理」により、仕訳帳に記載する。
(a) 予算科目から、統一的な基準の勘定科目を「特定できる」場合
・工事請負費・公有財産購入費・委託費等の固定資産に係る予算科目を除くと、その多くの予算科目は、行政コストに計上されるものと資産に計上されるものとに、特定されている。
・特定された予算科目は、統一的な基準の地方公会計マニュアル資金仕訳変換表「別表6-1:6-2」に従い、仕訳変換処理する。
・仕訳変換処理の設定をしておけば仕訳集計が、自動計算されるので、簿記の知識の有無は重要ではない。
(b) 予算科目から、統一的な基準の勘定科目を「特定できない」場合
・「特定できない」場合とは、工事請負費等の固定資産に係る予算科目の場合であり、個別伝票毎に、その歳入歳出について、行政コストなのか資産形成なのか、科目及び金額を特定する必要がある。
・資産形成か維持補修費の特定は、簿記の知識が必要となり、システムの自動計算で変換してくれない。
- ② 仕訳記帳されていない非資金取引(見えないお金)は、複式簿記により、仕訳帳に記載する。
・発生主義取引による非資金仕訳例は、「財務書類作成要領」の「別表7」に例示されている。
・作成担当者は、発生主義データの意味、計算過程を知る必要があるので、複式簿記の知識が必要である。

(3) 仕訳変換処理の単位

- ① 仕訳帳は、歳入歳出データを単位として、伝票単位毎に作成することを、原則とする。
- ② 歳入歳出データとの整合性が検証できる場合には、「予算科目単位で集計した歳入歳出データ」に仕訳を付与し、仕訳帳の1単位とすることも妨げない。」という、予算科目単位の集計値による変換法とする。(マニュアル「財務書類作成要領29段落」)

(4) 財務書類の作成ツール

- ① 「財務書類作成要領29段落」による集計値を使用する方法によれば、仕訳変換処理で特定できる場合の仕訳件数は、概ね節の科目数(歳入16・歳出28)程度の仕訳で済むので、表計算ソフトでの対応が可能となり、検証もしやすい。
- ② 当事務所の財務書類作成ソフトは、平成27年11月27日に特許権を取得した。

Ⅱ 平成29年度 南陽市財務書類の公表について

平成18年6月に成立した「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」を契機に、地方の資産・債務改革の一環として「新地方公会計制度の整備」が位置づけられました。これにより「新地方公会計制度研究会報告書」で示された「基準モデル」又は「総務省方式改訂モデル」を活用して、地方公共団体単体及び関連団体等を含む連結ベースでの財務書類を人口3万人以上の都市においては、平成21年度までに整備し公表するよう通知されました。

こうした状況を踏まえ、本市では平成20年度から「総務省方式改定モデル」により資産台帳の整備に着手し、複式簿記に基づき発生主義による財務書類を作成することにより、本市が所有する全ての資産と負債状況や行政サービスに要したコストを把握してまいりました。

しかし、平成26年4月30日に財務書類の作成方法の統一化のための「今後の新地方公会計の推進に関する研究会報告書」が取りまとめられ、平成27年1月23日に「統一的な基準による地方公会計マニュアル」が取りまとめられました。本市では平成27年度から「統一的な基準」により財務書類を作成することにしました。これにより団体間の比較可能性が確保され、将来的には決算分析や予算編成への活用を考えています。

連結対象とした会計の範囲



※ 全体とは、一般会計等に特別会計を含めたもので、連結とは、全体に外郭団体を含めたものです。
なお、外郭団体のうち第三セクターについては、市の出資比率が50%以上の団体を対象としています。

Ⅲ 平成29年度 財務書類（要約）

（1）貸借対照表（バランスシート）（平成30年3月31日）

平成30年3月31日現在に保有する資産、負債、純資産を表示したもので、地方自治体が、住民サービスを提供するために保有している資産と、その資産をどのような財源（負債・純資産）で賄ってきたのかについて、総括的に示したものです。行政的には、資産は、サービス提供能力を示し、負債は、将来世代の負担を示し、純資産は、現在までの世代の負担と捉えます。

（単位：百万円）

項目	資産の部						負債の部						
	一般会計等		全体		連結		項目	一般会計等		全体		連結	
	金額	比率	金額	比率	金額	比率		金額	比率	金額	比率	金額	比率
(1)固定資産	44,937	95%	67,651	95%	70,569	95%	(1)固定負債	16,633	35%	33,573	47%	35,650	48%
(1)有形固定資産	43,247	92%	64,249	90%	66,794	90%	①地方債等	14,385	30%	23,912	33%	25,514	34%
①事業用資産	24,653	52%	24,653	34%	26,701	36%	②退職手当引当金	2,248	5%	2,613	4%	3,019	4%
②インフラ資産	18,407	39%	39,238	55%	39,240	53%	③その他	0	0%	7,048	10%	7,117	10%
③物品	187	0%	358	1%	852	1%	(2)流動負債	1,552	3%	2,664	4%	3,022	4%
(2)無形固定資産	0	0%	1,058	1%	1,061	1%	①1年内償還予定地方債等	1,256	3%	2,082	3%	2,315	3%
(3)投資その他の資産	1,690	4%	2,344	3%	2,714	4%	②未払金	0	0%	249	0%	306	0%
①投資及び出資金	395	1%	398	1%	243	0%	③その他	297	1%	333	0%	401	1%
②長期延滞債権	107	0%	243	0%	243	0%							
③基金	1,325	3%	1,852	3%	2,220	3%							
④徴収不能引当金	-12	0%	-25	0%	-25	0%							
⑤その他	-124	0%	-124	0%	33	0%							
(2)流動資産	2,250	5%	3,817	5%	4,058	5%							
①現金預金	999	2%	2,388	3%	2,515	3%							
②未収金	25	0%	206	0%	320	0%							
③財政調整基金等	1,226	3%	1,226	2%	1,226	2%							
④徴収不能引当金	-0	0%	-18	0%	-22	0%							
⑤その他	0	0%	14	0%	19	0%							
資産の部合計	47,187	100%	71,468	100%	74,627	100%	負債の部合計	18,185	39%	36,237	51%	38,672	52%
							純資産の部						
							純資産の部合計	29,002	61%	35,231	49%	35,955	48%
							負債・純資産の部合計	47,187	100%	71,468	100%	74,627	100%

住民一人当たり

項目	一般会計等	全体	連結	項目	一般会計等	全体	連結
資産の部	149 万円	226 万円	236 万円	負債の部	57 万円	114 万円	122 万円
				純資産の部	92 万円	111 万円	114 万円

項目の説明

- (1)-(1)有形固定資産
- ①事業用資産：庁舎や学校などの有形固定資産
 - ②インフラ資産：道路や河川などの社会基盤となる資産
 - ③物品：器具備品や機械装置などの資産
- (1)-(2)無形固定資産
- ソフトウェア等無形の資産
- (1)-(3)投資その他の資産
- ①投資及び出資金：運用目的の有価証券や出資金等の資産
 - ②長期延滞債権：税等の未収金や貸付金などの回収期限到来後1年を経過した資産
 - ③基金：特定の目的のために積立した資産
 - ④徴収不能引当金：長期延滞債権や長期の貸付金に対して徴収不能とみられる金額を見積り引当した金額
- (2)流動資産
- ①現金預金：形式収支額（歳入歳出の差し引き額）や歳計外現金などの現金や預金の資産
 - ②未収金：税金や使用料手数料のうち回収期限到来後1年を経過していない資産
 - ③財政調整基金等：財政調整基金や1年以内に地方債の償還に充てられる減債基金
- (1)固定負債
- ①地方債等：地方債・借入金残高のうち翌年度に償還する額を除いた残高
 - ②退職手当引当金：将来の退職者に対する給付すべきこととなる退職金の引当額
- (2)流動負債
- ①1年内償還予定地方債等：地方債・借入金残高のうち翌年度償還予定額
 - ②未払金：企業会計団体の財貨または用役の提供を受けたが、支払が済んでいない残高
- ◎ 純資産合計
- これまでの世代が負担して蓄積された資産

概要

今までに南陽市では、一般会計等ベースで472億円、全体ベースで715億円、連結ベースで746億円の資産を形成してきました。

そのうち、純資産である、290億円（一般会計等）、352億円（全体）、360億円（連結）については、これまでの世代の負担で支払いが済み、負債である182億円（一般会計等）、362億円（全体）、387億円（連結）について、これからの世代が負担していくことになります。

※ 平成30年3月31日の南陽市の人口： 31,666 人

※四捨五入したため一致しない部分があります。

(2) 行政コスト計算書及び純資産変動計算書(平成29年4月1日から平成30年3月31日)

行政コスト計算書は、1年間の行政運営コストのうち、福祉サービスなどの提供といった資産形成に結びつかない行政サービスに要したコストを人件費、物件費、その他の業務費用、移転費用に区分して表示したものです。

純資産変動計算書(NWM)は、純資産(過去の世代や国・県が負担した将来返済しなくてよい財産)が年度中にどのように増減したかを、①財源、②資産評価差額、③無償所管替等、④その他に区分して表示したものです。

(単位:百万円)

項目	一般会計等		全体		連結	
	金額	比率	金額	比率	金額	比率
1 経常費用 計 (行政コスト総額)	13,417	103%	20,962	107%	22,262	112%
① 人件費	2,230	17%	2,673	14%	3,555	18%
② 物件費等	4,561	35%	5,897	30%	6,863	35%
③ その他の業務費用	200	2%	453	2%	493	2%
④ 移転費用	6,426	49%	11,939	61%	11,352	57%
2 経常収益	357	3%	1,479	8%	2,547	13%
3 臨時損失	8	0%	197	1%	208	1%
4 臨時利益	66	1%	78	0%	107	1%
純行政コスト	13,002	100%	19,602	100%	19,817	100%
5 財源	12,652	97%	19,346	99%	19,585	99%
① 税収等	9,377	72%	13,693	70%	13,917	70%
② 国県等補助金	3,274	25%	5,653	29%	5,668	29%
本年度差額	-350	-3%	-255	-1%	-231	-1%
6 資産評価差額	-0	0%	-0	0%	8	0%
7 無償所管替等	0	0%	5	0%	5	0%
8 その他の純資産変動額	-2	0%	-2	0%	55	0%
本年度純資産変動額	-352	-3%	-252	-1%	-163	-1%
前年度末純資産残高	29,353	-	35,483	-	36,118	-
本年度末純資産残高	29,002	-	35,231	-	35,955	-
※固定資産等の変動(内部変動)・固定資産等形成分	-1,024	-	-1,154	-	-1,020	-
・有形固定資産等の増加	565	-	1,217	-	1,343	-
・有形固定資産等の減少	1,551	-	2,379	-	2,538	-
・貸付金・基金等の増加	718	-	836	-	877	-
・貸付金・基金等の減少	756	-	828	-	702	-

住民一人当たり

項目	一般会計等	全体	連結
1 純行政コスト	41 万円	62 万円	63 万円
2 財源	40 万円	61 万円	62 万円
3 本年度差額 (2財源 - 1純行政コスト)	-1 万円	-1 万円	-1 万円

項目の説明

1 経常費用	①人件費：職員給与や議員報酬、退職給付費用など ②物件費等：備品や消耗品、委託費、使用料施設等の維持修繕に係る経費や事業用資産の減価償却費など ③その他の業務費用：地方債、関係団体の借入金の償還利子や徴収不能引当金繰入額など ④移転費用：住民への補助金や児童手当、生活保護費などの社会保障費など
2 経常収益	施設を使用した際に徴収する使用料や証明書の発行手数料、財産売払収入、雑入など
3 臨時損失	災害復旧事業費、資産の除売却損など臨時に発生するもの
4 臨時利益	資産の売却益など臨時に発生するもの
5 財源	①税収等：市税や利子割交付金などの交付金、特別会計の保険料等の収入など ②国県等補助金：国や都道府県からの補助金収入
6 資産評価差額	有価証券等の評価差額など
7 無償所管替等	無償で譲渡または取得した固定資産の評価額など
※固定資産の変動	有形固定資産・貸付金・基金等将来世代に対する資産形成の状況をいう

概要

平成29年度の純行政コストは、一般会計等ベースで130億円、全体ベース196億円、連結ベースで198億円になります。

住民の皆さんが負担した市税や国県等補助金などの財源は、一般会計等ベースで127億円、全体ベースで193億円、連結ベースでは196億円になります。

純行政コストと財源に資産評価差額無償所管替等を加減した本年度純資産変動額は、一般会計等ベースで△4億円、全体ベースで△3億円、連結ベースで△2億円であり、将来返済しなくてよい財産が一般会計等、全体、連結すべてで減少したことになります。

また、将来の世代に対する固定資産の変動状況ですが、一般会計等ベースで△10億円、全体ベースで△12億円、連結ベースで△10億円となり、一般会計等、全体、連結すべてで減少しました。

※四捨五入したため一致しない部分があります。

(3) 資金収支計算書（平成29年4月1日から平成30年3月31日）

1年間の資金の増減を業務活動収支、投資活動収支、財務活動収支に区分し表示したものです。

(単位:百万円)

項目	一般会計等	全体	連結
(イ)業務活動収支(④-③+②-①)	1,070	2,007	2,360
①業務支出(注)	11,923	18,450	19,423
②業務収入	13,001	20,625	21,932
③臨時支出	8	168	178
④臨時収入	0	0	29
(ロ)投資活動収支(②-①)	-462	-756	-880
①投資活動支出	1,283	1,820	1,979
②投資活動収入	821	1,063	1,100
利払後基礎的財政収支(イ+ロ)	608	1,251	1,481
(ハ)財務活動収支(②-①)	-399	-921	-1,321
①財務活動支出	1,252	2,102	2,751
②財務活動収入	853	1,181	1,430
1 本年度資金収支額(イ+ロ+ハ)	209	330	160
2 前年度末歳計現金残高	771	2,038	2,333
3 比例連結割合変更に伴う差額	0	0	2
4 本年度末歳計現金残高(1+2)	979	2,368	2,495
5 本年度末歳計外現金残高	20	20	20
6 本年度末現金預金残高(4+5)	999	2,388	2,515
(注)うち、地方債等支払利息支出	139	331	348

項目の説明

イ-①業務支出：行政サービスを行う中で、毎年度継続的に支出されるもの
(人件費、物件費、補助費、扶助費など)

イ-②業務収入：行政サービスを行う中で、毎年度継続的に収入されるもの
(市税、保険料、使用料、手数料など)

イ-③臨時支出：行政サービスを行う中で、臨時的に支出されるもの(災害復旧事業費など)

イ-④臨時収入：行政サービスを行う中で、臨時的に収入されるもの
(資産の売却に伴う収入など)

ロ-①投資活動支出：公共施設や道路整備などの資産形成、投資や貸付金などの金融資産形成に支出したもの

ロ-②投資活動収入：公共施設の資産形成の財源に充てられた補助金収入、土地などの固定資産の売却収入など

ハ-①財務活動支出：地方債や借入金などの元本の償還

ハ-②財務活動収入：地方債や借入金の収入

概要

平成29年度は、一般会計ベースで2億円、全体ベースで3億円、連結ベースで2億円の資金が変動し、期末資金残高は、一般会計等ベースで10億円、全体ベースで24億円、連結ベースで25億円になりました。

利払後基礎的財政収支は、公債費を賄う財源となるものですが、一般会計等ベースで6億円、全体ベースで13億円、連結ベースで15億円でした。

※四捨五入したため一致しない部分があります。

IV 分析比率

1. 社会資本形成の世代間比率〔地方債等／（事業用資産＋インフラ資産＋物品）〕

- 社会資本の整備の結果を示す事業用資産とインフラ資産と物品を地方債等などによってどれくらい調達したかを表します。

この指標が高いほど将来の世代が負担する割合が高いことを表します。

	平成29年度	平成28年度	比較増減
一般会計等	36.2%	36.3%	-0.1%
全体	40.5%	41.2%	-0.7%
連結	41.7%	42.8%	-1.2%

2. 純資産比率〔純資産／総資産〕

- 企業会計でいう「自己資本比率」に相当し、この比率が高いほど財政状況が健全であるといえます。

総資産のうち返済義務のない純資産がどれくらいの割合かを表します。

	平成29年度	平成28年度	比較増減
一般会計等	61.5%	61.1%	0.3%
全体	49.3%	49.0%	0.3%
連結	48.2%	47.7%	0.5%

3. 負債比率〔負債／純資産〕

- 純資産（自己資本）に対する負債（地方債等）の割合を表すもので、この指標が低いほど財政状況が健全であるといえます。

	平成29年度	平成28年度	比較増減
一般会計等	62.7%	63.5%	-0.8%
全体	102.9%	103.9%	-1.1%
連結	107.6%	109.6%	-2.0%

4. 有形固定資産減価償却率〔減価償却累計額÷（有形固定資産－土地等＋減価償却累計額）〕

- 有形固定資産が耐用年数に対して、資産の取得からどの程度経過しているのかを全体として把握することができます。

	平成29年度	平成28年度	比較増減
一般会計等	50.9%	48.8%	2.1%
全体	44.5%	42.6%	1.9%
連結	45.9%	44.1%	1.9%

「負債比率」が一般会計等に比べて全体や連結の率が高いのは、水道事業や下水道事業が将来の使用料収入で資金回収することを前提として公債を活用する仕組みとなっていることに加えて、地方債の償還年限が一般会計等よりも長いことが主な要因です。

V 財務書類からわかること

(1) 比較分析のための前提条件等

(注1) 統一的な基準で財務書類を作成している5団体(可能な限り同規模)と比較し、分析比率を算出します。

(注2) 他団体数値は、前年度公表データから引用していますが、空欄は未公表部分です。

- ・ 分析比率算定のための基礎データ及び参考データ

	南陽市	米沢市	上山市	男鹿市	大町市	本巢市
住民数:人数	31,666	82,164	31,146	28,777	28,255	34,803
面積:Km ²	160.52	548.51	240.93	241.09	565.15	374.65
可住地面積:Km ²	64.92	132.86	78.58	115.69	155.00	55.19
職員数	285	966	322	459	627	301
財政力指数	0.46	0.55	0.48	0.36	0.43	0.61
経常収支比率	91.1	92.4	92.2	97.8	91.0	84.8
実質公債費比率	12.0	9.6	9.0	10.7	7.2	5.4
将来負担比率	122.60	63.0	135.3	105.7	56.7	28.7
特記事項						

(2) 基礎的財政収支の状況

・ 資金収支計算書は、1年間の資金の出入りを、現役世代のための「業務活動収支」と、将来世代のための「投資活動収支」と、公債に関する将来世代が負担すべき「財務活動収支」という三つに区分した計算書です。
その結果、「利払後基礎的財政収支」がどういう状況なのか、一目でわかるようになっています。

・ 利払後基礎的財政収支(プライマリーバランス)がゼロ以上であれば、公債に依存しない財政運営が行われたこととなります。

(単位:百万円)

	区分	南陽市	米沢市	上山市	男鹿市	大町市	本巢市
一般会計等	業務支出	11,923	30,465	11,015	13,291	14,664	12,405
	業務収入	13,001	33,455	12,616	14,189	14,583	13,593
	臨時支出	8	0	7	12	35	0
	臨時収入	0	0	0	0	0	0
	業務活動収支(現役世代収支)	1,070	2,990	1,594	886	-116	1,188
	投資活動支出	1,283	5,140	3,718	2,056	1,255	2,028
	投資活動収入	821	3,229	1,568	1,674	1,293	1,105
	投資活動収支(将来世代収支)	-462	-1,911	-2,150	-382	38	-923
	利払後基礎的財政収支	608	1,079	-556	504	-78	265
	地方債等支払利息	139	354	161	150	122	108
(加算)基礎的財政収支	747	1,433	-395	654	44	373	
全体	業務支出	18,450	53,415	18,979	25,310	21,441	16,499
	業務収入	20,625	58,299	21,225	27,345	22,666	18,571
	臨時支出	168	7	7	12	53	0
	臨時収入	0	0	0	30	0	0
	業務活動収支(現役世代収支)	2,007	4,877	2,239	2,053	1,172	2,072
	投資活動支出	1,820	7,471	4,404	2,232	1,848	2,398
	投資活動収入	1,063	4,268	1,862	2,117	1,532	1,162
	投資活動収支(将来世代収支)	-756	-3,203	-2,542	-115	-316	-1,236
	利払後基礎的財政収支	1,251	1,674	-303	1,938	856	836
	地方債等支払利息	331	756	322	483	521	300
(加算)基礎的財政収支	1,581	2,430	19	2,421	1,377	1,136	
連結	業務支出	19,423	68,703	23,823	30,988	28,523	23,132
	業務収入	21,932	69,675	24,586	33,354	29,976	25,876
	臨時支出	178	7	7	12	53	0
	臨時収入	29	4,378	1,970	30	1	0
	業務活動収支(現役世代収支)	2,360	5,343	2,726	2,384	1,401	2,744
	投資活動支出	1,979	7,793	5,272	2,473	2,094	2,773
	投資活動収入	1,100	3,847	2,126	2,117	1,592	1,237
	投資活動収支(将来世代収支)	-880	-3,946	-3,146	-356	-502	-1,536
	利払後基礎的財政収支	1,481	1,397	-420	2,028	899	1,208
	地方債等支払利息	348	0	329	492	537	304
(加算)基礎的財政収支	1,829	1,397	-91	2,520	1,436	1,512	

- ・ 作成方法は、歳入歳出決算書の「款・節・細節」から繰越金・公債発行・元金償還金を除外します。
- ・ 「基礎的財政収支」がゼロで成長率が利子率以上の場合、公債残高は増えないとされています。しかし、成長率が利子率以上という前提が成立しない場合には、利子償還金相当額、公債残高は増加していきます。
- ・ 財務省のHPでは、「財政収支」という言葉で表現しています。
「基礎的財政収支が均衡したとしても利払い費分だけ債務残高の実額は増加してしまいます。これを止めるためには、利払い費を含む財政収支を均衡させる必要があります。この財政収支の均衡とは、新たに借金をする額と過去の借金を返す額が同額である状態を言います。」

★ 特徴

- ・ 当該年度で公債を財源とする大きな普通建設事業があると、利払後基礎的財政収支は悪化します。
- ・ 財政調整基金等の大きな貯金を行うと、投資活動支出に含まれるので、利払後基礎的財政収支は悪化します。

(a) 公債等償還可能年数を比較(財政の健全性の指標)

- ・ 「公債等償還可能年数」は、自治体の現在の財政状態を表す重要な指標です。

(単位:年)

指標	会計区分	南陽市	米沢市	上山市	男鹿市	大町市	本巢市
公債等 償還可能 年数 (注)	一般会計等	26	32	-31	32	-216	62
	全体会計	21	33	-87	17	37	35
	連結会計	19	42	-66	17	36	25

(注) 計算式＝地方債等残高 ÷ 利払後基礎的財政収支

★ 特徴

- ・ 公債等償還可能年数は、本年度の収支が続くと仮定して、公債等残高がゼロになる必要年数です。
- ・ 他団体の連結の平均的な年数ですが、当事務所のデータによれば、住民数20万人台の自治体では、概ね20年から40年という数値の財政状態のところが多くなっています。
- ・ 住民数50万人以上の自治体では、利払後基礎的財政収支、公債等償還可能年数がマイナスで、公債残高が増えていくという状況のところが多くなっています。

(単位:百万円)

区分	決算年度	27	28	29	30	31	32
一般会計等	業務活動収支	1,078	1,383	1,070			
	投資活動収支	-992	-1,263	-462			
	利払後基礎的財政収支	86	120	608	0	0	0
	地方債等支払利息	262	154	139			
	(加算)基礎的財政収支	348	274	747	0	0	0
全体	業務活動収支	2,095	2,369	2,007			
	投資活動収支	-1,383	-1,554	-756			
	利払後基礎的財政収支	712	815	1,251	0	0	0
	地方債等支払利息	493	365	331			
	(加算)基礎的財政収支	1,205	1,180	1,581	0	0	0
連結	業務活動収支	2,223	2,762	2,360			
	投資活動収支	-1,454	-1,888	-880			
	利払後基礎的財政収支	769	874	1,481	0	0	0
	地方債等支払利息	531	381	348			
	(加算)基礎的財政収支	1,300	1,255	1,829	0	0	0

(単位:年)

区分	決算年度	27	28	29	30	31	32
公債等 償還可能 年数	一般会計等	192	133	26			
	全体会計	39	33	21			
	連結会計	40	33	19			

(単位:年)

臨財債控除後 地方債等償還 可能年数	一般会計等	127	87	16			
	全体会計	31	26	16			
	連結会計	33	27	15			

(3) 地方債等と現金預金の状況

★一般会計等の実質債務

(単位:百万円)

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	男鹿市	大町市	本巢市
借金	地方債等	14,385	31,797	16,375	14,492	15,539	15,212
	1年以内償還予定地方債等	1,256	3,060	1,119	1,589	1,326	1,269
	合計	15,641	34,857	17,494	16,081	16,865	16,481
貯金	固定基金	1,325	4,812	833	1,331	3,419	3,131
	現金預金	999	1,577	555	517	780	1,761
	財政調整基金等	1,226	2,344	1,402	885	1,707	4,626
	合計	3,550	8,733	2,790	2,733	5,906	9,518
	差引	12,091	26,124	14,704	13,348	10,959	6,963

★全体決算の実質債務

借金	地方債等	23,912	50,497	24,792	29,835	27,971	27,442
	1年以内償還予定地方債等	2,082	4,819	1,598	3,060	3,838	1,995
	合計	25,994	55,316	26,390	32,895	31,809	29,437
貯金	固定基金	1,852	5,555	1,729	1,331	3,419	3,817
	現金預金	2,388	5,308	1,471	1,474	2,560	2,950
	財政調整基金等	1,226	2,344	1,402	994	1,878	4,626
	合計	5,466	13,207	4,602	3,799	7,857	11,393
	差引	20,527	42,109	21,788	29,096	23,952	18,044

★連結決算の実質債務

借金	地方債等	25,514	53,364	26,146	30,607	28,156	28,466
	1年以内償還予定地方債等	2,315	5,569	1,599	3,201	3,877	2,110
	合計	27,829	58,933	27,745	33,808	32,033	30,576
貯金	固定基金	2,220	6,612	1,266	2,024	4,355	4,864
	現金預金	2,515	6,174	2,036	1,857	2,914	3,609
	財政調整基金等	1,226	2,345	1,403	1,121	1,980	4,976
	合計	5,961	15,131	4,705	5,002	9,249	13,449
	差引	21,868	43,802	23,040	28,806	22,784	17,127

(a) 住民一人当たり実質債務(財政の健全化の指標)

(単位:円)

区分	会計区分	南陽市	米沢市	上山市	男鹿市	大町市	本巢市
住民一人 当たり 実質債務 残高	一般会計等	381,821	317,949	472,099	463,843	387,861	200,069
	全体会計	648,242	512,499	699,544	1,011,085	847,708	518,461
	連結会計	690,590	533,105	739,742	1,001,008	806,371	492,113

(注)計算式=実質債務(臨財債を含む)÷住民数

(4) 地方債等と現金預金の経年推移

★一般会計等の実質債務

(単位:百万円)

区分	項目	27	28	29	30	31	32
借金	地方債等	15,101	14,788	14,385			
	1年以内償還予定地方債等	1,412	1,252	1,256			
	合計	16,513	16,040	15,641	0	0	0
貯金	固定基金	823	1,013	1,325			
	現金預金	1,147	798	999			
	財政調整基金等	729	1,574	1,226			
	合計	2,699	3,385	3,550	0	0	0
	差引	13,814	12,655	12,091	0	0	0

★全体決算の実質債務

借金	地方債等	25,643	24,812	23,912			
	1年以内償還予定地方債等	2,269	2,102	2,082			
	合計	27,912	26,914	25,994	0	0	0
貯金	固定基金	1,323	1,494	1,852			
	現金預金	2,245	2,065	2,388			
	財政調整基金等	729	1,574	1,226			
	合計	4,297	5,134	5,466	0	0	0
	差引	23,615	21,781	20,527	0	0	0

★連結決算の実質債務

借金	地方債等	28,127	26,400	25,514			
	1年以内償還予定地方債等	2,984	2,649	2,315			
	合計	31,111	29,049	27,829	0	0	0
貯金	固定基金	1,453	1,827	2,220			
	現金預金	2,327	2,360	2,515			
	財政調整基金等	729	1,574	1,226			
	合計	4,509	5,761	5,961	0	0	0
	差引	26,602	23,287	21,868	0	0	0

(a) 臨時財政対策債の推移

決算統計33表58行近辺の2列目・4列目より

(単位:百万円)

区分	項目	27	28	29	30	31	32
臨時財政 対策債	発行額	492	414	426			
	元金償還額	292	327	360			
	現在高	5,559	5,646	5,712	5,712	5,712	5,712

(単位:百万円)

区分	項目	27	28	29	30	31	32
臨時債 控除後現 在高	一般会計等	10,954	10,394	9,929	-5,712	-5,712	-5,712
	全会計	22,353	21,268	20,282	-5,712	-5,712	-5,712
	連結会計	25,552	23,403	22,117	-5,712	-5,712	-5,712

(5) 純資産変動計算書の「本年度差額」の状況

(a) 自治体間比較

NWMより

(単位:百万円)

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	男鹿市	大町市	本巢市
一般会計等	純行政コスト	13,002	33,516	11,814	15,769	15,294	14,337
	財源	12,652	32,780	12,403	14,452	13,685	12,836
	本年度差額	-350	-736	589	-1,317	-1,609	-1,501
全体	純行政コスト	19,602	49,894	19,384	24,924	18,601	18,477
	財源	19,346	49,507	19,994	22,714	17,256	17,006
	本年度差額	-255	-387	610	-2,210	-1,345	-1,471
連結	純行政コスト	19,817	54,827	21,572	30,659	25,013	24,773
	財源	19,585	54,496	22,623	28,457	23,802	23,322
	本年度差額	-231	-331	1,051	-2,202	-1,211	-1,451

(b) 経年比較

NWMより

(単位:百万円)

区分	項目	27	28	29	30	31	32
一般会計等	純行政コスト	12,056	12,259	13,002			
	財源	11,970	12,398	12,652			
	本年度差額	-86	139	-350	0	0	0
全体	純行政コスト	18,518	18,619	19,602			
	財源	18,832	19,235	19,346			
	本年度差額	314	615	-255	0	0	0
連結	純行政コスト	18,854	19,152	19,817			
	財源	18,969	19,485	19,585			
	本年度差額	115	333	-231	0	0	0

(注) 民間企業では、「本年度差額」が「利益」に相当するのでプラスの必要がありますが、公会計は利益目的ではありません。公会計の場合、減価償却費が計上されるので、ほとんどの自治体でマイナスになります。

(6)純資産変動計算書の「固定資産等の変動」の状況

(a) 自治体間比較

NWMより

(単位:百万円)

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	男鹿市	大町市	本巢市
一般 会計等	固定資産等の変動(内部変動)	-1,024	-1,964	982	-1,855	-1,356	-1,742
	有形固定資産等の増加	565	1,077	3,597	1,430	672	1,801
	有形固定資産等の減少	1,551	4,505	2,934	3,105	1,389	2,665
	貸付金・基金等の増加	718	4,063	1,480	626	583	227
	貸付金・基金等の減少	756	2,599	1,161	806	1,222	1,105
全体	固定資産等の変動(内部変動)	-1,154	-2,279	822	-2,349	-1,789	-2,371
	有形固定資産等の増加	1,217	3,082	4,827	2,306	1,528	2,177
	有形固定資産等の減少	2,379	6,634	4,325	4,517	2,740	3,639
	貸付金・基金等の増加	836	6,105	1,482	708	666	227
	貸付金・基金等の減少	828	4,832	1,162	846	1,243	1,136
連結	固定資産等の変動(内部変動)	-1,020		1,584	-2,342	-1,680	-2,225
	有形固定資産等の増加	1,343		5,615	2,354	1,701	2,428
	有形固定資産等の減少	2,538		4,475	4,652	2,817	3,852
	貸付金・基金等の増加	877		1,606	802	739	344
	貸付金・基金等の減少	702		1,162	846	1,303	1,145

(b) 経年比較

NWMより

(単位:百万円)

区分	項目	27	28	29	30	31	32
一般 会計等	固定資産等の変動(内部変動)	-204	-208	-1,024	0	0	0
	有形固定資産等の増加	839	379	565			
	有形固定資産等の減少	1,471	1,569	1,551			
	貸付金・基金等の増加	717	1,255	718			
	貸付金・基金等の減少	289	273	756			
全体	固定資産等の変動(内部変動)	-479	-516	-1,154	0	0	0
	有形固定資産等の増加	1,237	950	1,217			
	有形固定資産等の減少	2,215	2,429	2,379			
	貸付金・基金等の増加	803	1,308	836			
	貸付金・基金等の減少	304	345	828			
連結	固定資産等の変動(内部変動)	-712	-334	-1,020	0	0	0
	有形固定資産等の増加	1,334	1,297	1,343			
	有形固定資産等の減少	2,534	2,752	2,538			
	貸付金・基金等の増加	810	1,328	877			
	貸付金・基金等の減少	322	208	702			

(7) 歳入歳出決算書の経年データ

歳入歳出決算書より

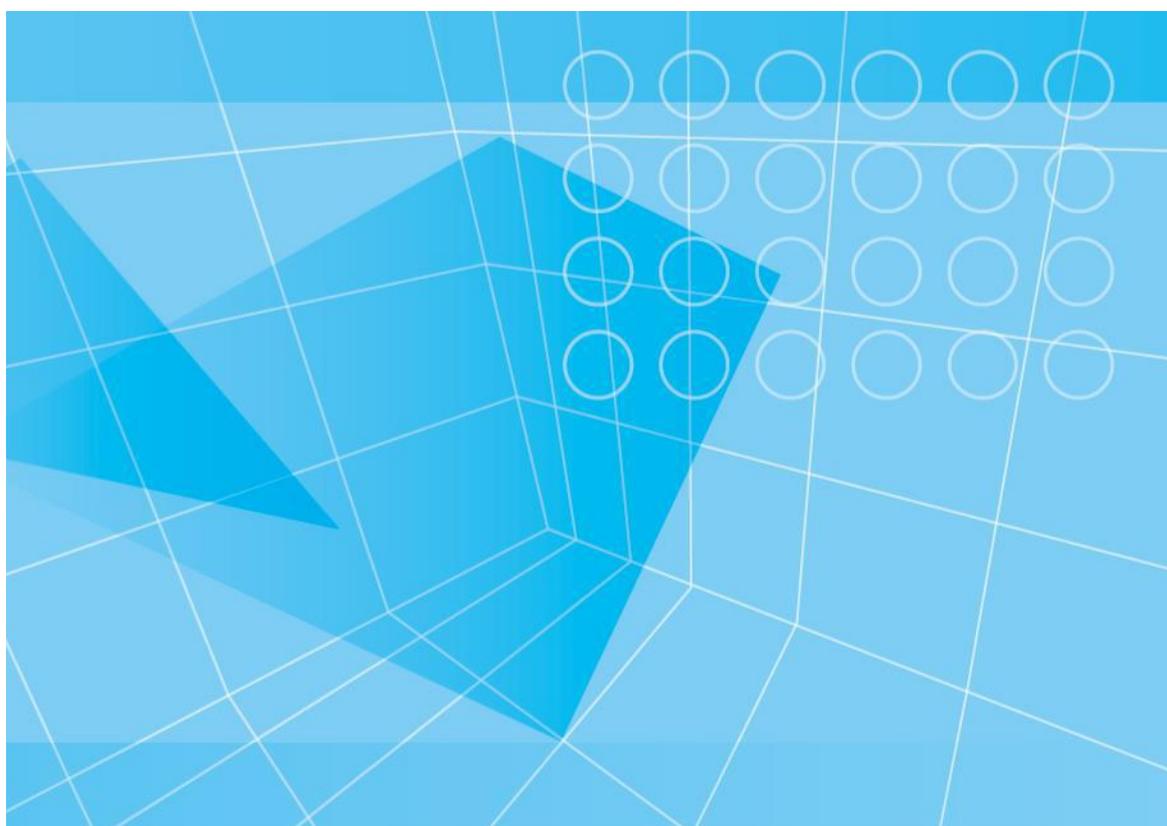
(単位:百万円)

款 or 節		27	28	29	30	31	32
予算現額		15,375	15,772	15,437			
収入済額	市町村税	3,534	3,537	3,600			
	地方消費税交付金	594	534	564			
	地方交付税	4,457	4,427	4,266			
	国庫支出金	1,696	1,719	1,636			
	都道府県支出金	971	1,274	1,639			
	その他の款	1,400	1,535	2,111	0	0	0
	小計(①)	12,652	13,026	13,816	0	0	0
	繰越金	945	1,118	762			
公債発行	1,434	789	853				
合計(②)	15,031	14,933	15,431				
予算現額と収入済額との比較(予算差異)		344	839	6	0	0	0
支出済額	委託料	1,524	1,663	1,918			
	工事請負費	1,172	530	625			
	負担金及び補助交付金	2,088	2,387	2,697			
	扶助費	1,895	1,979	2,507			
	繰出金	1,627	1,602	1,644			
	その他の節	4,093	4,594	3,682	0	0	0
	小計(③)	12,399	12,755	13,073	0	0	0
	公債費	1,514	1,416	1,391			
合計(④)	13,913	14,171	14,464				
不用額		344	839	6	0	0	0
歳入歳出差引額(②-④)		1,118	762	967	0	0	0
実質収支 に関する 調書 より記入	翌年度へ繰越すべき財源	46	50	32			
	実質収支額	1,072	712	935	0	0	0
	基金繰入額	0	0	0			
	翌年度繰越金	1,072	712	935	0	0	0

財源内訳

決算統計 13表 より記入	国庫支出金	1,684	1,699	1,625			
	都道府県支出金	967	1,274	1,638			
	使用料手数料	126	149	163			
	分担金負担金寄附金	206	194	207			
	財産収入	15	15	16			
	繰入金	33	83	55			
	諸収入	148	147	133			
	繰越金	0	0	0			
	地方債	940	374	427			
	一般財源等	9,784	10,224	10,188	0	0	0
歳出合計	13,903	14,159	14,452				

平成29年度
南陽市の財務書類
【分析編】



南陽市財政課

平成29年度決算に係る「統一的な基準による財務書類」について、以下の各表から抽出したデータを活用し、分析を行いました。

◆貸借対照表

貸借対照表は、基準日時点において、地方公共団体が住民サービスを提供するために、どれほどの資産や債務を有するかについて情報を示すものです。資産と財源となる負債及び純資産の合計は必ず一致します。負債は、将来世代の負担を意味し、純資産は、現在までの世代の負担ととらえます。

資産規模がどの程度あり（資産合計）、それに対する将来世代の負担（負債合計）が何%あるのか、また、一般会計等、全体会計、連結会計のそれぞれの区分ごとにどの程度あるのかを読み取ることができます。

◆行政コスト計算書

行政コスト計算書は、行政コストという経費明細という位置付けにあり、発生主義数値を含んだ現役世代に対する資源の配分の状況を示しています。行政コストの面では、人にかかるコストである人件費、物にかかるコストである物件費等、移転的な支出である移転費用等といった区分が設けてあります。

◆純資産変動計算書

貸借対照表の「純資産の部」に計上されている各数値が1年間でどのように変動したかを表している計算書です。

一会計期間に、税金と補助金収入を財源として、現役世代に対してどの程度資源配分したのか、また、将来世代に対してどの程度資源配分したのか、つまり発生主義数値ではあるが住民から拠出された税金等が、どのように配分されたのかということを表しています。

◆資金収支計算書

資金収支計算書は、「業務活動収支」、「投資活動収支」、「財務活動収支」という表示区分を設けて収支状況を明示しています。

業務活動収支 : 地方公共団体の経営活動に伴い、継続的に発生する資金収支

投資活動収支 : 地方公共団体の将来世代に対する投資活動に伴い発生する資金収支

財務活動収支 : 地方公共団体の負債の管理に係る資金収支（負債の発行及び償還）

業務活動収支は税金と補助金収入を財源として、現役世代に対してどの程度資源配分したのかを表します。業務活動収支と投資活動収支を合算して、プラスの場合借金が減少したことを意味し、マイナスの場合借金が増加したことを意味します。

3つの収支について、主なタイプの例示（赤色矢印の方向が資金の流れを示します。）

タイプ例	図解	汲み取ることのできる内容
健全タイプ		<ul style="list-style-type: none"> ◆ 経常的に発生する業務活動により獲得した資金を将来のために投資 ◆ それでもなお余る資金は借金の返済（市債の償還）に充てる ◆ 公共資産への投資と借入金の返済を業務活動収支の範囲内により行っているため、健全といえる
積極投資タイプ		<ul style="list-style-type: none"> ◆ 経常的に発生する業務活動により獲得した資金を将来のために投資 ◆ かつ、借金（市債の発行）をしてその資金を投資に充てている ◆ 業務活動収支の範囲を超えて（将来負担のリスクをとって）積極的に公共投資を行っている
債務圧縮タイプ		<ul style="list-style-type: none"> ◆ 経常的に発生する業務活動により獲得した資金を借金の返済（市債の償還）に充てている ◆ かつ、公共資産や出資を売却する等して得た資金を借金の返済（市債の償還）に充てている ◆ 債務が減少しているため、将来リスクは減少しているが、必要な投資を行う余裕がない

平成29年度決算において、南陽市は「健全タイプ」に区分されます。

◎財務書類分析の視点

総務省から示された以下の分析の視点を参考に分析を行いました。

【分析の視点】	【住民のニーズ】	【指 標】
資産形成度	将来世代に残る資産はどのくらいあるのか	<ul style="list-style-type: none"> ◆住民一人当たり資産額 ◆有形固定資産の行政目的別割合 ◆歳入額対資産比率 ◆有形固定資産減価償却率 (資産老朽化比率)
世代間公平性	将来世代と現世代との負担の分担は適切か	<ul style="list-style-type: none"> ◆純資産比率 ◆社会資本等形成の世代間負担比率 (将来世代負担比率) 【関係指標】 将来負担比率
持続可能性 (健全性)	財政に持続可能性があるか (どのくらい借金があるか)	<ul style="list-style-type: none"> ◆住民一人当たり負債額 ◆基礎的財政収支 ◆債務償還可能年数 【関係指標】 健全化判断比率
効 率 性	行政サービスは効率的に提供されているか	<ul style="list-style-type: none"> ◆住民一人当たり行政コスト ◆性質別・行政目的別行政コスト
弾 力 性	資産形成を行う余裕はどのくらいあるか	<ul style="list-style-type: none"> ◆行政コスト対税收等比率 【関係指標】 経常収支比率 実質公債費比率
自 律 性	歳入はどのくらい税金等で賄われているか (受益者負担の水準はどうなっているか)	<ul style="list-style-type: none"> ◆受益者負担の割合 【関係指標】 財政力指数

1 資産形成度 将来世代に残る資産はどのくらいあるのか

資産形成度は、「将来世代に残る資産はどのくらいあるのか」といった住民の関心に基づくものです。

資産に関する情報は、歳入歳出決算書に添付される「財産に関する調書」においても、公有財産、物品、債権、及び基金の種別により記載されています。しかし、土地及び建物並びに山林は、地積や面積で測定され、動産も個数で表示されるなど、市が保有する資産の価値に関する情報を得ることができません。

貸借対照表（BS）は、資産の部において市の保有する資産のストック情報を一覧表示しており、これを「市民一人当たり資産額」や「有形固定資産の行政目的別割合」、「歳入額対資産比率」、「有形固定資産減価償却率」といった指標を用いてさらに分析することで新たな情報を得ることができます。

市民1人当たり資産額		平成27年	平成28年	平成29年
資産総額 住民基本台帳人口	一般	149.9万円	150.0万円	149.0万円
	全体	224.9万円	226.1万円	225.7万円
	連結	235.7万円	236.5万円	235.7万円

資産総額を住民基本台帳人口で除することにより、市民1人当たりの資産額を算出します。類似団体との比較に利用します。

平成27年から平成29年にかけて、一般、全体、連結とも横ばいとなっています。これは、資産額が減少しているのと同じ割合で、住民基本台帳人口の減少が生じているためです。平成29年度は、道路橋りょうのほか、沖郷学童保育施設、地域防災拠点広場などが新たに資産として計上されています。

【資産総額】

	H27	H28	H29	H27～H29減少額
一般	48,567百万円	48,007百万円	47,187百万円	▲1,380百万円
全体	72,900百万円	72,363百万円	71,468百万円	▲1,432百万円
連結	76,388百万円	75,694百万円	74,627百万円	▲1,761百万円

【住民基本台帳人口】

平成27年	32,408人	平成28年	32,009人	平成29年	31,666人	(▲742人)
-------	---------	-------	---------	-------	---------	---------

※一般的な値 : 100万円～300万円程度

歳入額対資産比率		平成27年	平成28年	平成29年
資産総額 収入総額	一般	3.4年	3.5年	3.2年
	全体	3.3年	3.3年	3.1年
	連結	3.0年	3.1年	3.0年

資金収支計算書の収入総額に対する資産総額の割合をいいます。これまでに形成された資産が収入の何年分に相当するかを表し、地方公共団体の資産形成の度合いを測ることができます。

平成28年から平成29年にかけて、一般、全体、連結それぞれわずかに減少しています。これは、資産の減少（分子の減少）と合わせて、収入が増加した（分母の増加）ことによるものです。収入が増加した要因としては、業務収入のうち「国県等補助金収入」が前年比3.5億円の増加となったことなどが挙げられます。

南陽市は、一般的な団体の平均より低い数値となっています。この歳入額対資産比率が高ければ、社会資本の整備に重点を置いてきたことを表しますが、歳入規模に対して過度の社会資本整備を行っている場合などは、今後それらの維持のための負担が大きくなり、将来の財政運営を圧迫するおそれがあります。必ずしも高ければよいものではないことに留意する必要があります。

※一般的な値 : 3.0年～7.0年程度

有形固定資産減価償却率		平成27年	平成28年	平成29年
償却資産の減価償却累計額 償却資産の取得価額等	一般	46.6%	48.8%	50.9%
	全体	40.6%	42.6%	44.5%
	連結	42.5%	44.1%	45.9%
<p>有形固定資産のうち償却資産の取得価額等に対する減価償却累計額の割合をいいます。 耐用年数に対して資産の取得からどの程度経過しているのかを表し、資産の老朽化のおおよその割合を測ることができます。</p> <p>一般的に数値が高いほど老朽化が進んでいるといえますが、本市においては公共施設を長く維持、し活用していくため、施設の長寿命化に取り組んでいます。そのため、この数値は今後上昇していくことが予想されます。</p> <p>平成27年から平成29年にかけて、一般4.3%、全体3.9%、連結3.4%それぞれ増加しています。これは取得額に比較して減価償却額が大きいことを示しています。</p> <p>本市においては、文化会館が平成26年に建築された影響（取得価格が大きく、かつ減価償却累計額が小さいのでこの数値を下げる要因となります。）で、有形固定資産減価償却率は低くなっています。しかしながら、本市の公共施設の約4割が築30年を経過するなど、全体としては施設の老朽化が進んでいる状況にあります。</p> <p>※一般的な値 : 35%～50%程度</p>				

2 世代間公平性 将来世代と現世代との負担の分担は適切か

世代間公平性は、「将来世代と現世代との負担の分担は適切か」といった住民の関心に基づくものです。これは、貸借対照表上の資産、負債及び純資産の対比によって明らかにされます。

世代間公平性を表す指標としては、地方財政健全化法における「将来負担比率」もありますが、貸借対照表により、財政運営の結果として、資産形成における将来世代と現世代までの負担のバランスが適切に保たれているのか、どのように推移しているのかを端的に把握することが可能となります。「純資産比率」や「社会資本等形成の世代間負担比率（将来世代負担比率）」が分析指標として挙げられます。

純資産比率		平成27年	平成28年	平成29年
$\frac{\text{純資産総額}}{\text{資産総額}}$	一般	60.1%	61.1%	61.5%
	全体	47.6%	49.0%	49.3%
	連結	45.2%	47.7%	48.2%

資産総額のうち返済義務のない純資産がどれくらいの割合かを表します。
純資産の変動は、将来世代と現世代の間で負担の割合が変動したことを意味します。

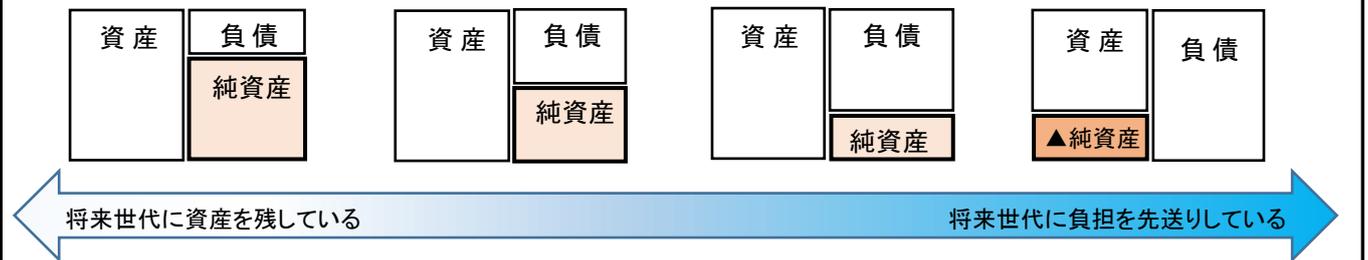
企業会計でいう自己資本比率に相当し、この比率が高いほど財政状況が健全であるといえます。
平成27年から平成29年にかけて、一般1.4%、全体1.7%、連結3.0%それぞれ増加しています。
これは、資産総額が減少しているなか、純資産の減少が緩やかであったことによります。

【資産総額】 前述のとおり	【純資産総額】	H27	H28	H29
一般	一般	29,202百万円	29,353百万円	29,002百万円
全体	全体	34,727百万円	35,483百万円	35,231百万円
連結	連結	34,497百万円	36,118百万円	35,955百万円

純資産額の増加は、現世代が自らの負担によって将来世代も利用することができる資源を蓄積したことを表しています。反対に純資産の減少は、将来世代が利用することができた資源を現世代が消費して便益を受ける反面、将来世代に負担が先送りされたことを表します。

全体、連結の値が低いのは、水道事業及び下水道事業の仕組みが、将来の使用料収入で回収することを前提としていることや、地方債の償還年限が長期であることが要因です。

※一般的な値 : 50%~90%程度



将来世代負担比率		平成27年	平成28年	平成29年
$\frac{\text{地方債} + \text{1年内償還予定地方債}}{\text{有形固定資産} + \text{無形固定資産}}$	一般	36.4%	36.3%	36.2%
	全体	41.2%	40.5%	39.8%
	連結	44.0%	42.2%	41.0%

社会資本等について地方債により形成した割合をいいます。数値が大きいほど社会資本等の形成に係る将来世代の負担の比重が大きくなります。

平成27年から平成29年にかけて、一般0.2%、全体1.4%、連結3.0%それぞれ減少しています。
これは、将来世代の負担が着実に減少していることを表しています。数値が減少した要因は、地方債の減少です。

【地方債の額】	H27	H28	H29	H27~H29減少額
一般	15,101百万円	14,788百万円	14,385百万円	▲716百万円
全体	25,643百万円	24,812百万円	23,912百万円	▲1,731百万円
連結	28,127百万円	26,400百万円	25,514百万円	▲2,613百万円

※一般的な値 : 10%~40%程度

3 持続可能性（健全性）

財政に持続可能性があるか

持続可能性（健全性）は、「財政に持続可能性があるか（どのくらい借金があるか）」という住民の関心に基づくものであり、財政運営に関する本質的な視点といえます。これに対しては、第一に、地方財政健全化法の「健全化判断比率」（実質赤字比率、連結実質赤字比率、実質公債費比率及び将来負担比率）による分析が行われますが、これに加えて財務書類も有用な情報を提供することができます。

市の負債に関する情報については、現行の「予算に関する説明書」においても、債務負担行為額及び地方債現在高についてそれぞれ調書が添付されていますが、貸借対照表においては、このほかに退職手当引当金や未払金など、発生主義により全ての負債を捉えることが可能となります。

財政の持続可能性に関する指標としては、「市民一人当たり負債額」、「基礎的財政収支（プライマリーバランス）」、「債務償還可能年数」があります。

市民1人当たり負債額		平成27年	平成28年	平成29年
負債総額 住民基本台帳人口	一般	59.8万円	58.3万円	57.4万円
	全体	117.8万円	115.2万円	114.4万円
	連結	129.3万円	123.6万円	122.1万円

人口1人当たりの負債総額をいいます。類似団体との比較に利用します。

平成27年から平成29年にかけて、一般2.4万円、全体3.4万円、連結7.2万円それぞれ減少しています。これは、負債のうち、地方債（地方債と1年内償還予定地方債の合計額）の減少によるものです。

平成29年度一般会計等においては、市債発行額8.5億円に対し、元金償還額12.5億円となっており、市債残高（地方債の額+1年内償還予定地方債の額の合計）が4.0億円減少しています。

【地方債の額】 前述のとおり	【1年内償還予定地方債の額】		
		H27	H28
一般	1,412百万円	1,252百万円	1,256百万円
全体	2,269百万円	2,102百万円	2,082百万円
連結	2,984百万円	2,649百万円	2,315百万円

※一般的な値 : 30万円～100万円程度

基礎的財政収支 (プライマリーバランス)		平成27年	平成28年	平成29年
業務活動収支－支払利息支出(▲) +投資活動収支	一般	3.5億円	2.7億円	7.5億円
	全体	12.1億円	11.8億円	15.8億円
	連結	13.0億円	12.6億円	18.3億円

支払利息支出を除く業務活動収支及び投資活動収支の合計額をいいます。地方債等の元利償還額を除いた歳出と地方債等発行収入を除いた歳入のバランスを表します。

各年度ともにプラスの数値を確保しており、公債費に依存しない財政運営が行われたことを示しています。

この数値が均衡（0に近い。）している場合には、経済成長率が長期金利を下回らない限り経済規模に対する地方債の比率は増加せず、持続可能な財政運営であるといえます。反対にこの数値が大きくマイナスになると、その年の経費が市債に依存しないと賄えなかったことを意味し、そのままの財政運営を継続していくことは困難になります。

債務償還可能年数		平成27年	平成28年	平成29年
地方債＋1年内償還予定地方債 業務収入－業務支出	一般	12.2年	11.1年	14.5年
	全体	11.8年	11.0年	12.0年
	連結	12.1年	10.2年	11.1年

業務活動収支（臨時収支を除く。）に対する地方債残高の割合をいいます。
地方債の償還に要する年数を表し、年数が短いほど債務償還能力があるといえます。

平成27年から平成28年にかけて、一般、全体、連結ともそれぞれ減少し、平成28年から平成29年にかけては増加しています。平成29年度一般会計等においては、前年比3.4ポイント数値が上昇していますが、これは分母である「業務活動収支」が前年比▲3.7億円（14.5億円→10.8億円）減少したことによります。

債務償還可能年数は、償還財源上限額を全て債務の償還に充当した場合に、何年で現在の債務を償還できるかを表す理論値です。債務の償還原資を経常的な業務活動からどれだけ確保できているかということは、債務償還能力を把握する上で重要な視点のひとつといえます。

※一般的な値 : 3年～9年程度

(注) 「自治体担当者のための公会計の統一的な基準による財務書類の作成実務」落合幸隆著（株）ぎょうせい においては、債務償還可能年数の計算式を以下のとおり示していますが、他市では上記の計算式を採用しています。
本報告においては、他市との比較を容易にするため上記の計算式で分析を行いました。

【計算式】 (将来負担額 － 充当可能基金残高) ÷ (業務収入等 － 業務支出)

4 効率性 行政サービスは効率的に提供されているか

効率性は、「行政サービスは効率的に提供されているか」という住民の関心に基づくものです。地方自治法においても、第2条第14項において「地方公共団体は、その事務を処理するに当たっては、住民の福祉の増進に努めるとともに、最小の経費で最大の効果を挙げるようにしなければならない」とされています。財政の持続可能性と並んで住民の関心が高い視点といえます。

行政の効率性を表す「行政コスト計算書」は、市の行政活動に係る人件費や物件費等の費用を発生主義に基づきフルコストとして表示するものであり、行政の効率化を目指す際に不可欠な情報を一括して提供するものとなっています。

行政コスト計算書においては、「住民一人当たり行政コスト」を用いることにより、効率性の度合いを定量的に測定することが可能となります。

住民1人当たり行政コスト		平成27年	平成28年	平成29年
純行政コスト 住民基本台帳人口	一般	37.2万円	38.3万円	41.1万円
	全体	57.1万円	58.2万円	61.9万円
	連結	58.2万円	59.8万円	62.6万円

住民1人当たりの行政コストをいいます。

類似団体との比較に利用することで、地方公共団体の行政活動の効率性を比較することができます。

平成27年から平成29年にかけて、一般3.9万円、全体4.8万円、連結4.4万円それぞれ増加しています。これは、純行政コストの増加と住民基本台帳人口の減少によるものです。

【純行政コストの額】

	H27	H28	H29	H27～H29増加額
一般	12,056百万円	12,259百万円	13,002百万円	946百万円
全体	18,518百万円	18,619百万円	19,602百万円	1,084百万円
連結	18,854百万円	19,152百万円	19,817百万円	963百万円

純行政コストが増加した要因としては、「経常費用」内の、福祉サービスの提供といった資産形成に結びつかない行政サービスに要したコストのうち「移転費用」に区分される費用（社会保障給付支出、補助金等支出、他会計への繰出支出等）が増加したためです。H29年度一般会計等においては、補助金等支出が前年比315百万円の増（2,382百万円→2,697百万円）となっています。

※ 住民1人当たり行政コストについては、地方公共団体の人口や面積、行政権能等により異なります。一概に他団体との比較を行うことは適切ではないため、比較する際には類似団体で行うこととされています。

5 弾力性 資産形成を行う余裕はどのくらいあるか

弾力性は「資産形成等を行う余裕はどのくらいあるか」といった住民の関心に基づくものです。

財政の弾力性については、一般に、「経常収支比率」等が用いられますが、財務書類においても弾力性の分析が可能となっています。「純資産変動計算書」において、市の資産形成を伴わない行政活動に係る行政コストに対して地方税、地方交付税等の当該年度の一般財源等がどれだけ充当されているか「行政コスト対税収等比率」を示すことができます。

これは、市がインフラ資産の形成や施設の建設といった資産形成を行う財源的余裕度がどれだけあるかを示しています。

行政コスト対税収等比率		平成27年	平成28年	平成29年
純経常行政コスト 財源	一般	98.7%	100.8%	103.2%
	全体	97.0%	98.0%	100.7%
	連結	97.7%	97.9%	100.7%

資産形成を伴わない行政活動に係る行政コストに対して地方税、地方交付税等の当該年度の一般財源等がどれだけ充当されているかを示します。

平成27年から平成29年にかけて、一般4.5%、全体3.7%、連結3.0%それぞれ増加しています。これは、財源の増加を純行政コストの増加が上回ったことによります。この比率が100%に近づくほど資産形成の余裕度が低いといえ、さらに100%を上回ると、過去に蓄積した資産（基金など）が取り崩されたことを表します。

平成29年度一般会計等においては、基金取崩収入は、前年比490百万円の増（170百万円→660百万円）となっています。

【純経常行政コストの額】				
	H27	H28	H29	H27～H29増加額
一般	11,808百万円	12,491百万円	13,060百万円	1,252百万円
全体	18,268百万円	18,844百万円	19,483百万円	1,215百万円
連結	18,536百万円	19,084百万円	19,716百万円	1,180百万円

【財源の額】				
	H27	H28	H29	H27～H29増加額
一般	11,970百万円	12,398百万円	12,652百万円	682百万円
全体	18,832百万円	19,235百万円	19,346百万円	514百万円
連結	18,969百万円	19,485百万円	19,585百万円	616百万円

※平均的な値：90%～110%程度

6 自律性 行政コストに対する受益者の負担はどのくらいあるか

自立性は「歳入はどのくらい税収等で賄われているか（受益者負担の水準はどうなっているか）」といった住民の関心に基づいています。

これは市の財政構造の自律性に関するものであり、決算統計における「歳入内訳」や「財政力指数」が関連しますが、財務書類についても、「行政コスト計算書」において使用料・手数料などの受益者負担の割合を算出することが可能であるため、これを受益者負担水準の適正さの判断指標として用いることができます。

受益者負担の割合		平成27年	平成28年	平成29年
$\frac{\text{経常収益}}{\text{経常費用}}$	一般	3.1%	2.6%	2.7%
	全体	7.6%	7.2%	7.1%
	連結	15.5%	11.5%	11.4%

経常費用に対する使用料及び手数料を主とする経常収益の割合をいいます。
受益者が負担しない部分については、税、地方交付税及び補助金等により賄われます。

平成27年から平成29年にかけて、一般0.4%、全体0.5%、連結4.1%それぞれ減少しています。これは、経常収益が減少したことに対し、経常費用が増加したことによります。

一般的に病院、ガス、上下水道事業を行う地方公共団体は、受益者負担比率の数値が高くなる傾向があります。

【経常収益の額】

	H27	H28	H29	H27～H29減少額
一般	371百万円	332百万円	357百万円	▲14百万円
全体	1,496百万円	1,471百万円	1,479百万円	▲17百万円
連結	3,407百万円	2,479百万円	2,547百万円	▲860百万円

【経常費用の額】

	H27	H28	H29	H27～H29増加額
一般	12,179百万円	12,824百万円	13,417百万円	1,238百万円
全体	19,764百万円	20,315百万円	20,962百万円	1,198百万円
連結	21,943百万円	21,563百万円	22,262百万円	319百万円

※平均的な値：2%～8%程度

(注) 「自治体担当者のための公会計の統一的な基準による財務書類の作成実務」落合幸隆著(株)ぎょうせいにおいては、受益者負担の割合の計算式を以下のとおり示していますが、他市では上記の計算式を採用しています。

本報告においては、他市との比較を容易にするため上記の計算式で分析を行いました。

【計算式】 使用料及び手数料 ÷ 純経常行政コスト

【参考資料】 「自治体担当者のための公会計の統一的な基準による財務書類の作成実務」
落合幸隆著 (株)ぎょうせい